琉球列島の先史時代遺跡出土の穿孔具考

Perforators Unearthed from the Prehistoric Sites in Ryukyu Archipelago

盛本　勲
MORIMOTO Isao

ABSTRACT: A variety of shell artifacts is seen in the archaeological and folklore material in the Amami and Okinawa districts with the lagoon environments. This paper attempts to compile the possible perforating implements among the archaeological artifacts of unknown function, and to examine their function as the perforator through observation, folklore investigation and experiments. The material of the possible perforators includes shell and spine of slate-pencil sea-urchin. The form of their functioning-parts is classified in three categories: point, chisel and others. These forms resemble to those of the folklore material, therefore, such perforators must have been used for producing shell weights and so on.

1．はじめに

日本列島の南西端に位置し、サンゴ礁に囲繞された特異な水域環境にある琉球列島では、地域的特性として、先史時代以来、容易に採取可能な貝類を生活用具の素材としたものが多い、ということは先学によって指摘されているところである[1)]。

この事象は、サンゴ礁の分布や、それと密接に関連している貝類等の天然分布と同様、トカラ列島以北に比して、奄美・沖縄諸島はその頻度がより高い。また、奄美・沖縄の両諸島を比較した場合、より沖縄諸島が高い、ということが指摘できる。

かかる製品は、その種類も多岐にわたり、考古および民具の両物質文化資料を通して見られるが、考古資料においては、その用途や機能が判然としないものも少なくない。

小稿で検討しようとする資料もその一つで、当該地域の先史時代遺跡出土のエゾバイ科：イトマキボラ類やホラガイ科等の腹足綱（巻貝）の殻軸やゴホウラと推されるスイショウガイ科若しくはソデガイ科の外唇部付近の殻の厚い部分、あるいはパイプウニの棘等を用いて、ノミあるいはヘラ状、ポイント状などに加工した製品である。

これらは、木下尚子分類の漁撈・採集・加工具中の漁撈・採集・加工：刺突具：に属するものである（木下1992）。

なお、後述するように、当該製品の有する属性と追体験等によって使用されている民具資料の有する形状等との比較検討の結果、かかる資料は穿孔具としての機能・用途を有していたものと考え、当該名称を使用する。

2．資料の概要

管見のところ、琉球列島におけるかかる資料は、11遺跡において14例以上が知られている（図１～３）。

はじめに、各資料の概要を北から順に記す。

１．鹿児島県大島郡笠利町あやまる第２貝塚（池畑・編1984）

１点の出土がある（図2-1）。標品は、多面体（７面）を有した角柱状の身部の先端に一方向のみ

からの研磨により付刃した片刃のノミ状を呈する製品である。

刃縁端部には、使用痕と思われる刃こぼれが見られ、身部の研磨面には図のように粗い擦痕が走っている。

頭部付近には、横位に穿孔を施した痕跡が観察される。欠損はしているものの、研磨面が横位に走っていること等から、完形に近い長さであろう。

全面的に入念な研磨が施されているため、詳細な使用貝種は判然としないが、報告者も述べているように、ゴホウラなどのような、厚みを有したスイショウガイ科、若しくはソデガイ科等の外唇部を使用したものと思われる。

長さ7.2cm、幅1.4cm、重量22.5ｇを測る。第６トレンチ２区出土。

２．沖縄県今帰仁村渡喜仁浜原貝塚（新田・編1977）

１点の出土がある（図２-４）。パイプウニの棘の先端部を両側から加工、付刃した製品である。

全体形状は、小型のノミ状をなす。身部の形状は、素材を活かした棒状を呈し、先端部に付刃された刃部形状は両刃状をなし、当該部の片側には抉りを有する。

法量は長さ5.6cm、幅1.4cmを測る。Ｂ地区Ⅳ層出土。

３．沖縄県恩納村仲泊遺跡第Ⅳ貝塚（金武・編1977）

１点の出土がある（図３-３）。比較的厚みのあるイモガイ科のアンボンクロザメガイ、若しくはクロフモドキ等の体層部を切り取り、先端部をポイント状に仕上げた製品である。上端部は欠失している。

身部の形状は、幅0.7cm程の細身の板状をなす。残存長3.8cm、幅0.7cmを測る。

岩陰B･Cとその前庭部出土。

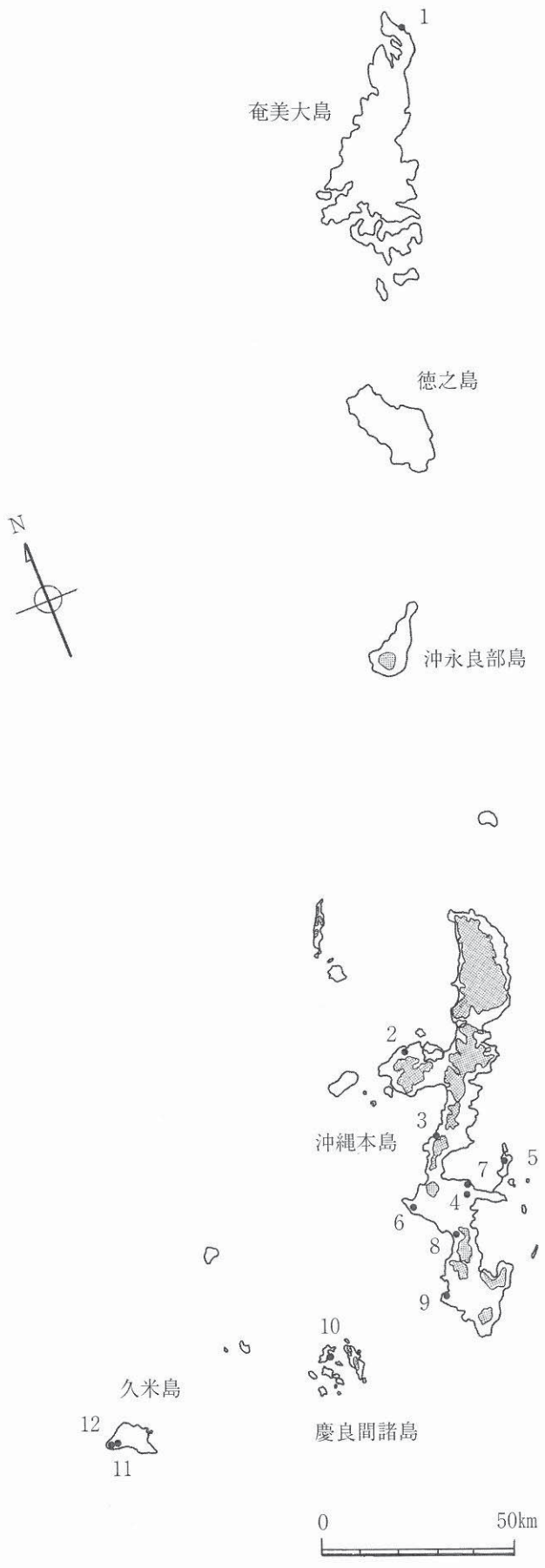

図１　出土遺跡分布図

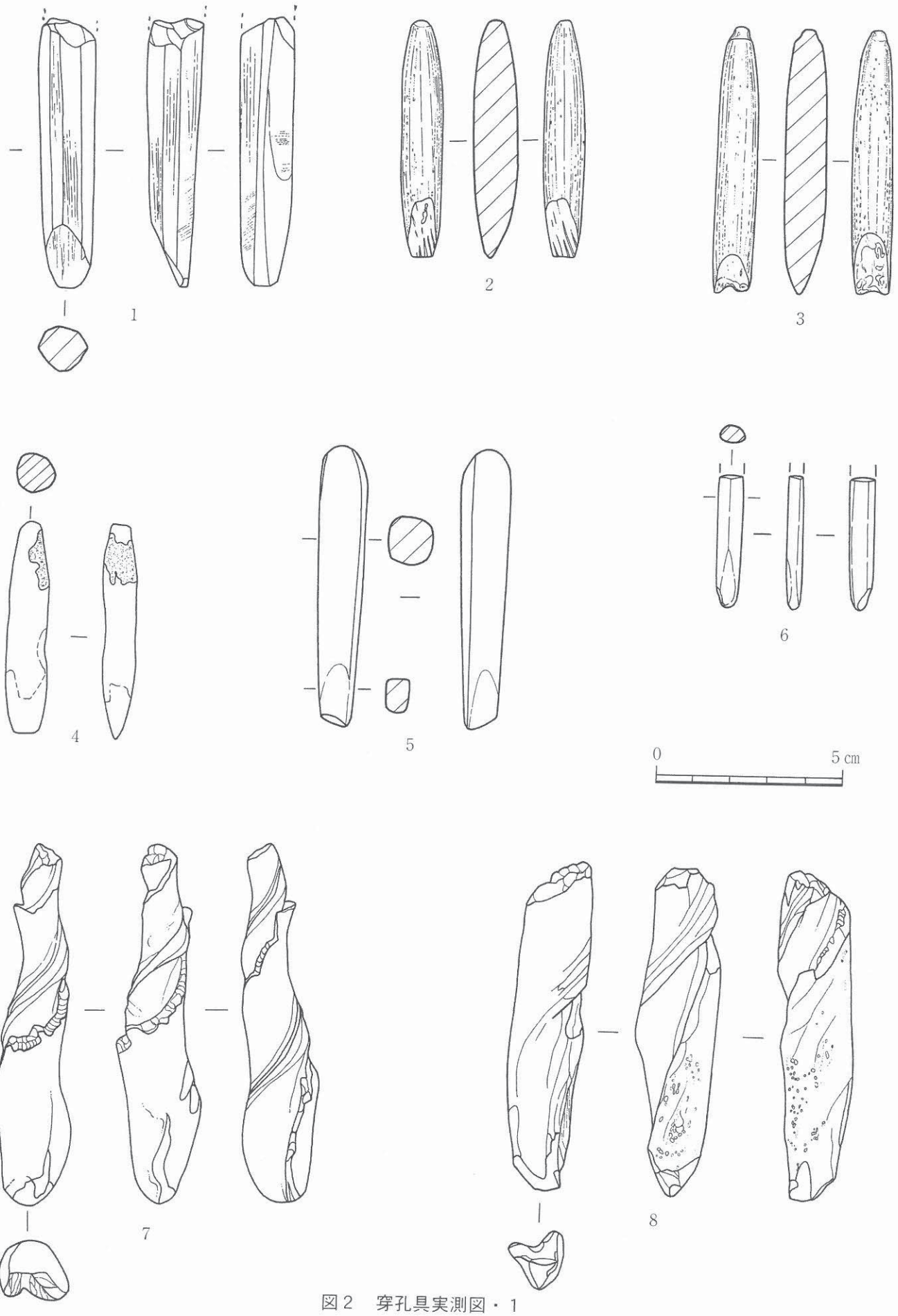

図２　穿孔具実測図・１

4．沖縄県具志川市地荒原貝塚（大城・大城編1986）

「b．尖頭状製品」の名称で、3点の報告があるが、うち1点は報告者も述べているように、穿孔を有することや扁平状を呈していることと、他の1点は別の機能・用途を有していたであろう、と考える。

このように、諸点を検討した結果、ここで検討しようとする資料には該当しないものとの理由から、図3-5に示した1点のみについて扱う。

標品はエゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を棒状に整形し、水管溝にあたる部分に付刃した製品である。刃部の先端形状は円錐状を呈す。刃部付近には、縦位に研磨痕が観察される。

長さ5.8cm、幅1.18cm、厚さ0.97cm、重量7.5ｇを測る。Ｆ－17グリッド：Ⅱ層20-40cmの出土。

5．沖縄県与那城町宮城島シヌグ堂遺跡（金武・編1985）

「尖頭状製品」の名称で、1点の出土がある（図2-7）。標品は、ゴホウラと推される腹足綱の殻口付近の比較的厚みを有した部分を棒状に切り取り、殻頂の反対方向を尖らせた製品である。

内唇面は研磨痕を比較的著しく残すが、他部には明瞭な研磨痕は観察できない。先端部は比較的緩やかに尖る。残存長10.2cmを測る。M-5･7グリッド：Ⅰ層出土。

6．沖縄県読谷村木綿原遺跡（当真・上原編1978）

パイプウニの棘を利用した製品が2点の出土がある（図2-2・3）。両者とも約7cm長の素材の先端部を両面より研磨し、付刃した製品である。2の刃部の研磨面には図のように、比較的荒い擦痕が斜位に走っている。

3は、刃縁部に刃こぼれが認められ、中央部付近が大きく欠損している。両者とも第Ⅳ層の第1号人骨近くよりの出土である。

2が長さ6.8cm、幅0.6cm、重量4ｇ、3が長さ7.1cm、幅0.6cm、重量4ｇを測る。Ⅰ地区・Ⅴ-20：Ⅳ層出土。

7．沖縄県具志川市アカジャンガー貝塚（金武・他1980）

「尖頭状製品」の名称で、1点の報告がある（図3-3）。貝を素材としているものの、風化等が著しく、具体的な種は判然としない。

標品は、頭部を欠失する身部から尖端部にかけての資料である。身部の最大径は3mmと細身で、略円形状なす。残存長3.7cm、幅0.4cmを測る。Ａ地区Ⅲ層出土。

8．沖縄県宜野湾市宇地泊兼久原遺跡（高宮・他1989）

「貝製利器」の名称で、2点の報告がある（図2-8、図3-1）。図3-1は、Ｏトレンチ Ⅱ層出土資料で、エゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を棒状に切り取り、下端部に付刃した製品である。刃部は入念な研磨が施されており、殻軸の状況から腹面は凸状、背面は平坦状をなすノミ形を呈す。

殻軸の上端部から中央部付近にかけて螺旋状に沿って縦位の研磨痕が見られ、上端部で鋭角な研磨が施されている。長さ8.9cm、最大幅2.1cm、重量50ｇを測る。図2-8は、Ｓ・Ｔトレンチ Ⅱ層出土資料である。ホラガイ科の殻軸の下端部を両面から研磨し、ノミ状に付刃したものである。刃部は使用によるものか、刃こぼれ様をなすとともに、摩耗している。長さ9.4cm、重量45ｇを測る。

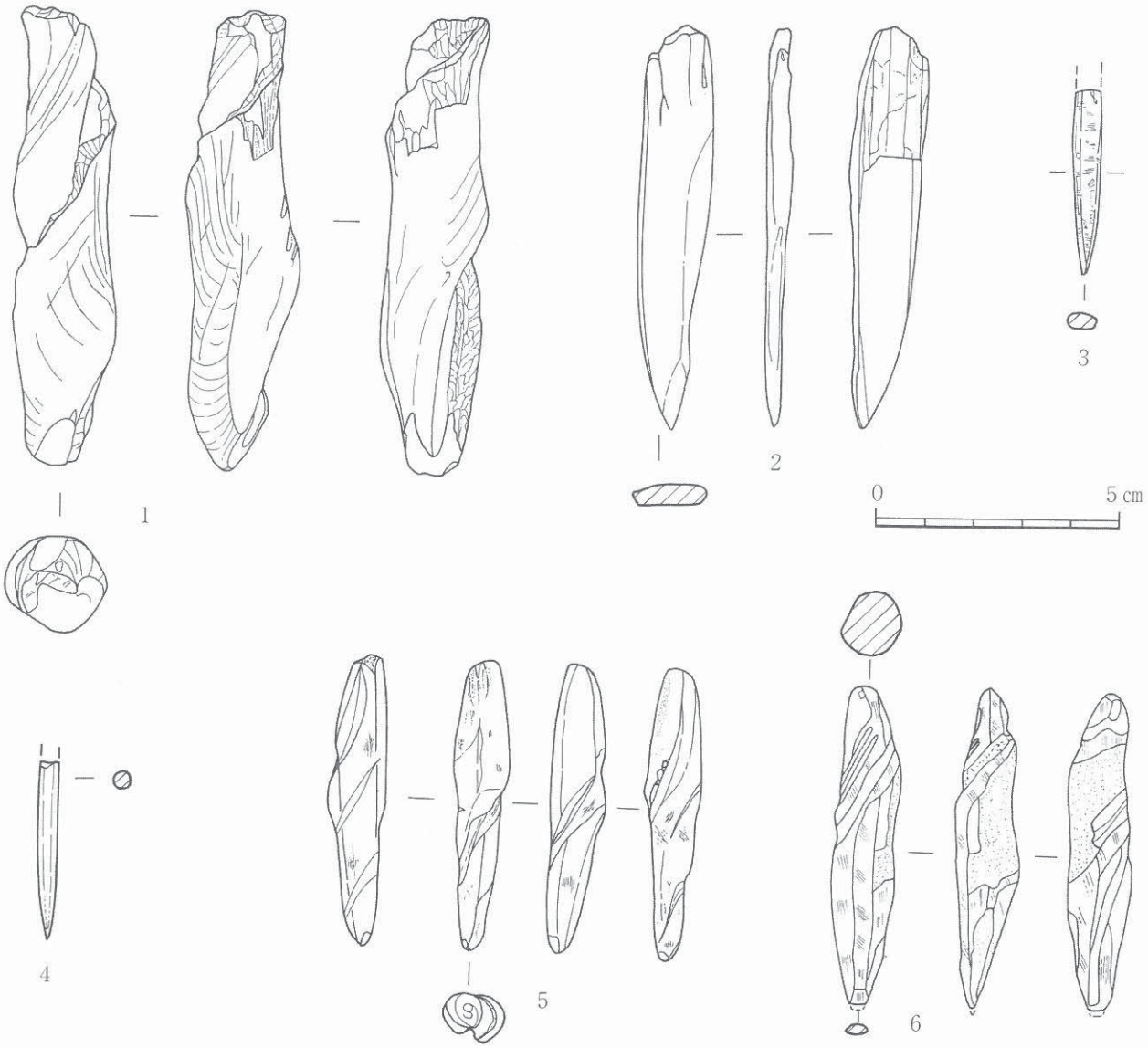

図３　穿孔具実測図・２

９．沖縄県浦添市嘉門貝塚Ａ（松川・編1991）

「尖頭状製品」の名称で、パイプウニ属の棘を利用した製品が１点得られている（図２-６）。

標品は、長さ約４cm長の素材の先端部を両面から研磨し、付刃した製品である。身部の表面は素材の原形を止め、比較的丸みを帯びるが、裏面は研磨が施され平滑をなす。先端部付近には、研磨痕と剥離が見られる。残存長3.6cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm、重量2.0ｇを測る。

10．沖縄県座間味村古座間味貝塚（岸本他・編1982）

エゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を利用した製品が１点得られている（図３-６）。

素材より棒状に切り取って整形後、全面的に入念な研磨によって仕上げている。刃部の両端は鋭く尖っている。法量は、長さ6.7cm、幅1.3cmを測る。Ⅱ区：第４号住居址内出土。

11．沖縄県久米島町大原貝塚群第１貝塚（当真・編1980）

イモガイ科の体層部を長軸方向に切り取って板状に仕上げ、その先端を尖らせたものである（図３-２）。先端部は、ポイント状に仕上げられている。表裏面は比較的丁寧に研磨を施すが、縁辺部は部分的に研磨しているのみである。頭部は剥離し、部分的にヒビが入っている。

長さ8.2cm、最大幅1.4cm、重量7.7ｇを測る。Ⅰ-22区：Ⅱ層出土。

他に「ホラガイ系螺軸加工ヘラ状利器」と称した製品が３点出土。長軸に巻かれたホラガイ系の螺層を、殻口付近からかき取り、残った中心の螺軸端部に両面より研磨附刃したものである。２点は殻頂部を残したままであること等から、ここで検討する資料には該当しないが、１点は対象となる可能性がある。平面観は、平刃状をなす。

12．沖縄県久米島町大原貝塚群第２貝塚Ｂ地点（盛本・編2000）

パイプウニ属の棘を利用した製品が１点得られている（図２-５）。素材の先端部を両面から研磨、加工して付刃した製品である。身部は素材の原形を止め、やや丸みを帯びるが、裏面は研磨が施され、平滑をなす。刃部付近には研磨痕が観察される。長さ7.6cm、幅2.3cm、厚さ1.2cmを測る。

３．資料の帰属時期

これらの資料で最古例に属するのは、沖縄前Ⅳ期前半（縄文後期前葉併行）に位置づけられている伊波式土器及び荻堂式土器に伴出した仲泊遺跡第Ⅳ貝塚例である。

当該例はイモガイ科の体層部使用例で、先端形状はポイント状を呈している。この仲泊遺跡第Ⅳ貝塚例とほぼ同時期か、あるいは若干後続する段階に属するのが地荒原貝塚例である。伴出土器は、荻堂式土器が主体をなしている。当該例は、エゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を円錐状に加工したものである。

これらに後続するのが、前Ⅳ期後半～Ⅴ期初頭頃（縄文後期後半～晩期初頭併行）に位置づけられている古座間味貝塚と渡喜仁浜原貝塚例である。古座間味貝塚例は、圧倒的主体を占める室川式土器を出土したⅡ区：第４号住居址内よりの出土である。古座間味例はエゾバイ科：イトマキボラ類の殻軸を利用し、渡喜仁浜原貝塚例はパイプウニの棘を素材とした製品である。両者とも先端形状は、両刃のノミ状を呈する。

この古座間味貝塚例及び渡喜仁浜原貝塚例に後続するのが、前Ⅴ期（縄文晩期併行）に位置づけられているシヌグ堂遺跡例と大原貝塚群第１貝塚例である。シヌグ堂遺跡例は、前Ⅴ期（縄文晩期併行）中葉頃に帰属する宇座浜式土器を主体とする土器群に伴出している。大原貝塚群第１貝塚例は、前Ⅳ期後半～Ⅴ期全般にわたる比較的幅広い時期の土器群に伴出しており、具体的な土器型式は特定できないが、主体をなしている土器群は前Ⅴ期頃に比定される土器群である。シヌグ堂遺跡例はポイント状、大原貝塚群第１貝塚例は身部が扁平なポイント状を呈する。

以上は、概ね沖縄前期（縄文時代併行期）に属する資料群であるが、この前期の終末から後続する後Ⅰ期併行期に位置づけられるのが宇地泊兼久原遺跡例である。２例ともイトマキボラ類、ホラガイ科等の巻貝の殻軸を利用し、下端部をノミ状に研磨して付刃した製品である。

次に、沖縄後期の弥生～平安初頭頃相当期の例を見てみると、弥生前～中期相当期（沖縄後Ⅰ期相当？）に位置づけられるのが、あやまる第２貝塚例である。当該例はゴホウラと推されるスイショウガイ科等の外唇部を使用して棒状に仕上げ、片刃のノミ状に加工した製品である。このあやまる第２貝塚例に後続するのが嘉門貝塚Ａ例である。当該例は、具志原式土器等の乳房状尖底土器を主体をな

す土器群に伴出していること等からして、後Ⅱ期（弥生中～後期併行？）に位置づけられよう。資料は、パイプウニの棘を利用し、ノミ状に仕上げた製品である。この嘉門貝塚Ａ例とほぼ同期に位置づけられるのがアカジャンガー貝塚例と大原第２貝塚Ｂ地点例である。アカジャンガー例は貝を素材としたポイント状、大原第二貝塚Ｂ地点例はパイプウニの棘に加工した製品である。

４．用途・機能の検討

用途・機能の検討に入る前に、かかる資料の有する素材、法量、刃部形状等の属性について整理しておきたい。

まず、素材であるが、14例中、エゾバイ科：イトマキボラ類やホラガイ科等の腹足綱（巻貝類）の殻軸の先端部への加工例とパイプウニの棘使用例が各々５例、イモガイ科の体層部使用例２、ゴホウラと推されるスイショウガイ科若しくはソデガイ科の外唇部付近使用例１、貝種不明１例となっている。これらを見た場合、イトマキボラ類やホラガイ科等の殻軸使用例と、仲泊遺跡第Ⅳ貝塚、大原貝塚群第１貝塚、宇堅貝塚例のように、イモガイ科等の体層部を使用した扁平若しくは細身の形態のものとは対象とするものが異なっていたであろう、ということは想像に易くない。

次に、法量であるが、完形品が多くなく、資料全体について比較検討を行う段階でない。完形品が少ないということについては、廃棄後の破損等をも含めて、種々の要因が想定されるが、使用時の欠損も大きな要因であろう。とりわけ、頭部については、追体験では鉄製のハンマー等により、一気に叩いて行うため、考古資料においても、河原礫等を用いたハンマー的な敲石等により、頭部を一撃により叩いているものと思われることを考慮にいれると、その可能性が大であろう。

用途・機能を検討していくうえで、これらの特に刃縁の大きさに着目した場合、総じてエゾバイ科：イトマキボラ類やホラガイ科の殻軸使用例、パイプウニの棘使用例、ゴホウラと推されるスイショウガイ科若しくはソデガイ科の外唇部使用例等の比較的幅広の刃縁を有する一群と、イモガイ科の体層部を使用した一群の、前者に比すると幅の狭い二タイプがある。幅広の一群は、さらに細分可能かと思われるが、これらは次に検討する刃縁形状とも密接な関係を有しているものと考えられるので、ここでは概括的に捉えておきたい。

刃縁形状は、基本的なタイプとして、二面からの研磨によって作出するノミあるいはヘラ状のタイプと、さらに二面以上からの研磨を加え、結果として四面、さらに複数面からの研磨によって作出されたポイント状の二タイプに大別できよう。仔細にみると、さらに細分可能かと考えるが、限られた資料の現状ではこの程度に止めておきたい。

これらの内訳は、ノミ若しくはヘラ状タイプ10例、ポイント状タイプ４例となっており、前者が主体をなしていることが判る。

以上、かかる製品の属性について検討を加えてきたが、ところで、これらは何に使用されたのであろうか。従前において、その機能・用途について言及した見解はなく、唯一、古座間味貝塚出土例に関し、「この種の製品は類例がなく詳細は不明であるが、形状より推してヤスのような機能を有していた可能性がある」と述べられているのみである（岸本他・編1982）。当該地方特有のサンゴ礁海域では、伝統的にヤス漁は未発達であること等を考慮すると、この機能推定には賛同し難い。

筆者はかつて、シャコガイ等を含めた貝製漁網錘を付した網の使用法、対象魚等に関する民俗学的調査を実施し、事例の比較検討を行うとともに、考古資料関する課題等に関しての指摘を行ったことがあるが（盛本1981・82）、この事例調査の中で、1980年10月６日に沖縄県座間味村慶留間の仲村徳太郎さん（明治42年生当時71歳）より、シャコガイ製漁網錘装着の網の使用法、対象魚等と併せてそ

写真・1　シャコガイ製漁網錘製作の追体験・1

写真・2　シャコガイ製漁網錘製作の追体験・2

写真・3　追体験によって製作されたシャコガイ製漁網錘

の製作法についての話を伺ったとともに、追体験により製作していただいた（写真１～２）。

仲村さんは慶留間（島）に生まれ育ち、幼少の頃から漁業に従事するが、慶留間は島民の多くが自給自足的な漁業を営んでいるため、商いとしては成り立たないため、農業も行った。また、昭和６年から終戦までは南洋諸島でカツオ漁に従事していた、とのことである。

この仲村さんの話と追体験は、貝の特性や使用法などとも密接な関係を示唆しているとともに、遺跡出土の同種製品を考えるうえで極めて重要な情報であった。

かかる追体験による情報等と考古資料との検討については、拙稿において述べたことがあるが（盛本1988）、ここではその製作上における道具について検討したい。なお、追体験に使用した資料は、海浜に打ち上げられていたシャコガイ科のシラナミガガイを採取してきて行っていただいた。

拙稿でも述べたように、穿孔はアサンザニ（本来、芋掘り用の耨耕具である）や五寸釘、タガネなどの先の尖った道具を使用し、貝の内側面を表にし、鉄製のハンマーで一気に叩く。この穿孔時に失敗することが多いらしく、追体験していただいた際も２例中１例は失敗した（写真３）。

この追体験からも窺えるように、シャコガイ科等の二枚貝の主歯に近い最も肉厚の殻頂部およびその周辺部に穿たれる粗孔製作にあたっては、先端部の尖った道具不可欠である。

そして、民具資料では追体験例にも見られたように、五寸釘やアサンザニ、タガネなどの鉄製の道具が用されている。ちなみに、これらの先端部形状を見た場合、五寸釘およびアサンザニは角錐すなわちポイント状、タガネにはノミ状若しくは角錐状、すなわちポイント状タイプのものがある。

本格的な鉄製道具の導入以前の琉球列島の先史時代においては、これに代わる素材が使用されていたのであろう。

5．まとめ

以上、前節までにて琉球列島、とりわけ中部以南の奄美・沖縄諸島の先史時代遺跡出土の「尖頭状製品」「貝製利器」等と報告されている資料を集成し、かかる資料の有する属性と、民俗調査による聞き取りや追体験による実見等との比較検討により、その機能・用途を推定してきた。

出土資料の使用素材には、貝とパイプウニの棘の二種が見られたが、パイプウニの棘は貝類に比して、強度の面で落ちる。したがって、両者を同様に捉えて良いか、ということについては疑問が残らない訳ではない。今後の課題として、記しておきたい。

そして、先端部形状は大別してノミ若しくはヘラ状、ポイント状の二タイプが見られ、その形状をはじめとした全体形状は、追体験によって使用されている民具資料の有する形状と類似することや、シャコガイ等をはじめとした二枚貝製錘などの製作にあたっては、かかる道具が不可欠であることから、それらなどの製作に使用したものであろうと考える。

このように、基本的にはシャコガイ等をはじめとした二枚貝製錘などの紐通し孔（粗孔）を穿つための道具に使用されたものであろうと考える。がしかし、単にそれのみの一元的な使用目的の道具と考えている訳ではないことは多言を要しないであろう。理由は、他の貝製品、例えばゴホウラ製腕輪の未製品の背面に粗孔を穿った資料が見られ、それらは交易品として移出する際の紐通し孔であろう、との解釈もなされているが、その正否は別として、この粗孔を穿つための道具として使用された可能性もあながち否定はできないどころか、むしろ大である。一方、かかる製品と類似の形態を有する石器も多くはないが、出土例が知られており、当該石器も使用されたであろう、ことは想像に易くないが、貝の加工等においては同質のモノがより効果的と考える。

6．おわりに

考古資料には、土器や貝輪、石斧などのように、使用例や着装、着柄例等から、機能・用途が判明しているものも少なくないが、その多くが判然としていない。

これらの判然としない考古資料に対し、その解釈や社会の復元などにあたって、民族学や民俗学的研究の成果を補助的に援用する場合があるが、渡辺誠は「伝統的な考古学的アプローチに固執せず、むしろそれに対する批判的な姿勢を含めて、民族考古学的手法を積極的に行うべきである」（渡辺1985）と述べるとともに、この民俗・民族学的手法も安易には行えず、対象となる民俗・民族学の調査方法が肝心であり、決して単なる残存文化としての調査としてではなく、生態・社会・技術の三者の条件調査として実施し、その一致率を高めたうえで援用すべきであると述べる（渡辺1985）。

筆者もこのスタンスに立脚し、微力ながら、琉球列島の考古学と民具学を繋ぐ物質文化史的構築を試みるための作業仮説として、これまでに調査、研究を進めてきたが、小稿もその一つである。

ここに提示した考えには、偏見的かつ一方的な解釈も少なくないであろう、ことは自明のことであり、他のより説得性の高い考えが提示されれば、修正を行っても良いと考えている。大方のご批正を願うしだいである。

末筆になりましたが、拙稿掲載の挿図の浄書にあたっては、外間瞳さんの手を煩わせた。銘記して謝意を述べるしだいである。

（もりもと　いさお：調査課長）

註

1）考古資料については木下尚子が（木下1992）、沖縄諸島域の民具資料については、上江洲均が（上江洲1990）、その体系な整理を行っている。

【参考文献】

池畑耕一・編，1984：あやまる第２貝塚。笠利町文化財報告NO.７。笠利町教育委員会。鹿児島県笠利町。

上江洲均，1980：沖縄の民具について。近畿民具。第４輯。pp２～12。近畿民具学会。大阪。1982：『沖縄の暮らしと民具』考古民俗叢書<19>所収。慶友社。東京。

大城慧・大城剛，1986：地荒原貝塚-個人住宅建築工事にかかる発掘調査報告-。具志川市教育委員会。具志川。

岸本義彦・他・編，1982：古座間味貝塚範囲確認調査報告書。沖縄県文化財調査報告書第43集。沖縄県教育委員会。那覇。

金武正紀・他，1977：仲泊遺跡　1975・1976年度発掘調査報告書。恩納村文化財調査報告書第１集。恩納村教育委員会。沖縄県恩納村。

金武正紀・他，1980：宇堅貝塚・アカジャンガー貝塚発掘調査報告。具志川市教育委員会。具志川市。

金武正紀・他，1985：シヌグ堂遺跡-第1･2･3次発掘調査報告。沖縄県文化財調査報告書第67集。沖縄県教育委員会。那覇。

木下尚子，1992：南島古代の貝文化。MUSEUM 東京国立博物館美術誌。NO.491。pp４～15。東京国立博物館。東京。1996：『南島貝文化の研究 貝の道の考古学』所収。pp427～423。(財)法政大学出版局。東京。

高宮廣衞・他，1989：宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告。沖国大考古。第10号。沖縄国際大学文学部考古学研究室。宜野湾。

当真嗣一・上原静編，1978：木綿原　沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書。読谷村文化財調査報告書第５集。読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館。沖縄県読谷村。

当真嗣一・編，1980：大原-久米島大原貝塚群発掘調査報告-。沖縄県文化財調査報告書第32集。沖縄県教育委員会。那覇。

新田重清・編，1977：渡喜仁浜原貝塚　調査報告書［Ⅰ］。今帰仁村文化財調査報告第１集。今帰仁村教育委員会。沖縄県今帰仁村。

松川　章・編，1991:嘉門貝塚Ａ-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書　Ⅱ-。浦添市文化財調査報告書第18集。浦添市教育委員会。浦添。

盛本　勲，1981：奄美・沖縄諸島における貝製漁網錘の研究。物質文化。第37号。pp27～45。物質文化研究会。東京。

盛本　勲，1982：奄美・沖縄諸島における貝製漁網錘の研究(その２)。物質文化。第38号。pp55～61。物質文化研究会。東京。

盛本　勲，1988：琉球列島の貝製漁網錘。季刊考古学。第25号-特集：縄文・弥生の漁撈文化-。pp71～78。雄山閣出版会。東京。

盛本　勲・編：2000：大原第二貝塚Ｂ地点発掘調査報告書。具志川村文化財報告書第３集。具志川村教育委員会。沖縄県具志川村。

渡辺誠，1995:『日韓交流の民族考古学』。名古屋大学出版局。名古屋。